

“但馬牛”今昔物語

兵庫県立但馬牧場公園 「但馬牛博物館」

館長 渡邊 大直

第11回「つる牛造成の始まり」

昭和の初め、京都大学の羽部義孝博士は江戸時代の“蔓牛”をモデルに、新たな“つる牛”を造ることを提唱しました。

博士は、和牛の改良には、特徴ある優れた遺伝子を確実に遺伝させる集団を造ることと、そこから生まれた種牛を組み合わせて能力の高い牛を生産する二つの仕組みが必要だとしました。この中の「特徴ある優良な遺伝子を確実に伝える集団」というのが“つる牛”です。

今、兵庫県では、ジーンドロッピングという手法で影響の強い祖先によってグループ化し、同じグループの種雄牛と基礎雌牛を指定交配して種雄牛候補雄子牛を造っています。そしてその雄子牛が基幹種雄牛になると、エムサスで産肉能力が高く近交係数が低い交配を選び、肥育素牛を造れるようになりました。博士がイメージしたのはこんな仕組みだったのかもしれませんが。

ところが、肥育素牛だけでなく種牛まで系統間交配して造るのが一般化し、中には輪番交配したような種牛もいて、どの牛も同じ祖先を持つ“遺伝的単一化”が進んでしまいました。

とんだ余談になってしまったので、話を戻します。

博士は、1941年に周助蔓をはじめ、鳥取、岡山の竹ノ谷蔓、広島岩倉蔓など、江戸時代の“蔓牛”を調査しました。

“蔓牛”には、強健で性質温順、繁殖力旺盛で連産し、長命で、泌乳量が多くて子牛の発育が良く、周助蔓以外は比較的大きいという共通点がありました。これは、使役と子牛生産という利用目的に必要な形質を全て備えているということで、“蔓牛”は極めて優秀な牛だったようです。

その上で、例えば周助蔓だと、品位に富み、骨は細く、毛は柔らかく繊細、皮膚は薄く、小柄ながら体幅広く、中躯の伸びがあり、体のバランスが良いというように、各蔓は特徴的な形質を持っていました。

そんな“蔓牛”を造った人にもいくつかの共通点がありました。

彼らは良牛を見分ける優れた眼を持ち、飼育技術も優れていました。

そして自分の牛を持っていました。自分の牛を持つのは当たり前だと思われるかもしれませんが、明治まで自分の牛を持っている人は少なかったです。家畜商から預かった牛や、地主が田圃と一緒に貸与している牛が多く、牛の値が上がると耕作に使う牛まで売られてしまったという話もあります。“蔓牛”を造ったのは富豊か家畜商で、眼鏡にかなった良牛を買い求めました。更に当時、種付は雄牛を専門に飼っている人に頼るのが普通ですが、地元の雄牛を使い、自分の眼鏡に合う子牛だけ残しました。こんなことは自分の牛だからこそできることで、その結果、“蔓牛”特有の遺伝子がホモ化されたと推測されています。

また前田周助には親戚が集まって勘当を相談したというエピソードがありますが、“蔓牛”創設者には、その過程で損したり、他人に批判されてもブレない不撓不屈の精神の持ち主という共通点もありました。

更にこれらの“蔓牛”は地域に広がったというのに、創設者が亡くなると消滅したり、実態を失ってしまう末路も似ていました。“蔓牛”のことは口伝えで伝わっていて、一片の記録文書もありません。どんな目標で、どんなポイントで牛を選んだらいったノウハウは全て造った人の頭の中にだけありました。“蔓牛”は全く個人的な産物で、その人が亡くなると消滅せざるを得なかったのでしょう。

“つる牛”は、和牛の育種資源となることを目指しているのだから、継続されなければならないし、近縁な牛の集団の中で、遺伝的劣形質を排除し、高い能力を持つよう改良しなければなりません。そのためには、“つる牛”候補の牛だけでなく、両親、祖父母、兄妹といった近縁の牛や、産子の調査もしなければなりません。個人でやるのは難しく、労力もかかり、無駄も多いでしょう。博士は、“つる牛”づくりは地域の農家や技術者の共通理解の下に、一致協力して組織的に取り組むべきだとしました。

博士の調査には、兵庫県種畜場や美方郡畜産組合が協力しました。それだけにこの結果を目の当たりにして、ジッとしていられなかったのでしょう。翌1942年には蔓牛研究会ができ、詳細な調査を行いました。そして1943年には“あつた蔓”、“ふき蔓”両造成組合は生まれ、“つる牛”造りがスタートしました。

しかし太平洋戦争の最中で、戦況は次第に悪化し、実質的な活動は戦後になってしまいました。戦争が終わると、1946年には城崎郡で“よし蔓”、出石郡で“いなきば蔓”、1949年には養父郡で“やぎだに蔓”造成組合ができ、但馬地域に広がりました。

和牛は1944年に黒毛和種という一つの品種になり、1950年から“つる牛”づくりは全国和牛登録協会の事業となりました。そして、但馬牛は各県の育種資源として求められ、“おなめ”は“こっつい”の倍以上で売れる時代になりました。